

Title	學書三昧
Author(s)	武内,義雄
Citation	懐徳. 1931, 9, p. 149-160
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88841
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

む前にゐたらしく、 叉た沿岸の蕃族は馬來諸島のものゝ仲間であるらしく、これ等は多分は漢民族の西北方から入り込 雕題とか黒歯さかいふ様な熱帯蕃族の風俗を以つて區別して先秦の文獻に見えて

わ る 。

平地 でも著 せるどいふ方針に出てゐる。 以上に述べた所は甚だ不十分であるが、 は 族が殘つてゐる。今も四川雲南には土司なるものがゐるのは、 徐程開發されてゐたことが知れる。 要するに秦漢の郡縣を置いた頃には江南の揚子江流域の諸 然れごもその文化が傳播しても山間の僻地はその後今日ま 蕃人の酋長をして蕃人を統御さ

學書三昧

は自己の職業に精進しなけ ればならぬことはいふまでもないが又同時にその職業から解脱して遊

武

内

義

雄

人

戯する 樂は解らず運動は嫌ひ、 境地もなくてはならぬ。これなき人は實に氣の毒千万なもので筆者も正にその一人である。音 まして圍碁や骨牌には尚更ら興味を覺われ、 さりとて書畵骨董をいぢる様な

「書訣」を讀んで智永の「千字文」を習ふがよいと教へて下さつた。早速象へられた本屋に行つて「書訣」 習つて見ようかといふ氣分になつて、先生に字はいかにして習ふべきかを尋ねた。先生は引法大師 を學書三昧と呼びたい、さうして多くの人々にもこの三昧に遊ぶことを御すゝめした 現在から超越して無我の境地に遊ぶ時があるとしたならばそれは字を習ふ時である。 そこは になつた。有体に白狀するが筆者は生來惡筆で、その上餘り努力しないのだから字は上達しないが、 と「千字本」とを購ひ求めた、さうしてその後讀書に厭いた時、無聊に苦しむときいつもこれを習ふ樣 餘裕はない、たゞ讀書にあいたときは肱を枕に晝寢する位が關の山である。偶然の思ひつきで字でも いふものゝ自分は非家でもなければ書論に通曉してゐる譯でもない。もし人から字のことをき かとなく古人の筆跡を臨書することは樂しみなものである。もし筆者に名利を離れ愛憎を雕 私はこ の心持ち

ことについて一言して見よう、もし同好の士に参考になることがあれば望外の幸ひであ てゐるから今更ら私の說明を娶する點はなからう。秋はたゞ智永の千字文及びそれに關係する法書の

するより外に道を知らない。大師の「書訣」は可なり讀み難い文章であるがそれには古人の註譯もつい

かれたなら、自分が先生から教はつた通り弘法大師の筆法で智永の千字文を習ふがよからうと受賣り

を習つてその妙を得、千字文八百部を書いて江東の名刹に納めたと言はれてゐる。現今智永の千字文

智永は有名な王羲之の七世の孫で家を捨てゝ僧となり、吳興の永欣寺に住したが、

永い

間

羲之の字

字毎に 或ひ の有に 字 ある Eli しな か しても石刻本よりは非常に優れたものである この影印本の原本は曾て京都の書家として知られた江馬天江翁の家にあつたが後に谷如意とい は智永の眞跡と稱せられる一本が存在して先年京都の山田聖華房といふ本屋で影印本が 文も亦梁 本 **董廣川の** は唐人が 楷 か か ものださい するものは此八百部の一が長安の崔氏の家に保存せられてゐたのによつて宋の大觀年中に石 別の 歸し、 体 否 Ġ, に近 皃 P 推 の武帝 書跋によると梁の武帝が殷鐡石といふ人に命じて王羲之の遺墨中から一千字を拾ひ出し一 紙 n は 察すると原本の にか ば 疑 今は大阪の小川 い字を拾つて千字文の眞書と比較すると、 智永を双鈎に取つて墨を塡めたものであるかについては學者の間に異論が は ኢ が集め が、 き、これを周興詞に命じて完全な韻文に排列せしめたが千字文の起りで、 n れを智永と斷定することは當を得たものであらう、 ぬでもな 多くは飜 しめ 最初 た王羲之の字を臨模したものだといつてゐる。 爲二郎氏の所有と成つてゐる。 ζ, が、 は破損して居り、 刻に飜刻を重ねたものでその神采を失つてゐる。 その文字の配置か 終りに跋語もないらし ら字形の一點一 その 間架筆意ともに 私は未だその原本を見たことはな 畫まで石刻の智永千字文 但それ Ü からそれが智永の千字 相 試みに王羲之蘭亭 通 かる 果して する 然るに幸ひわ 所 智永 る出來て か ある あ 30 智永 から 0) (と一致 、ふ書家 帖 何 Ö Ď 眞 か が影 の千 文で 國に に刻 0 12 か

しようさつさめたた

千字文は蘭亭よりは生采はあるが變化が乏しい、これは恐らく智永が字形を畫一

よると懐琳はよく王書を僞作したといはれてゐるが、絕交書の筆意は尤もよく千字文の草書に似てゐ はなければならぬ。從つて智永によつて王羲之に入る門徑とすることが可能きる。 之等の點から考へると智永の千字文が王書を臨模したものだといふ董廣川の説も根據あるも **叉往年上海の有正書局で影印された李懐琳の絶交書といふものがあつて竇氏の述書賦に**

王羲之は古今第一の能書家で稱せられてゐるが其眞跡に最も近いものはわが國に傳はつてゐる

亂帖」と「九月十七日帖」との二つて、 韵とを會得すべきであらう^o ばうとすれば先づこの智永千字文によつて筆意を會得し更に種々の石拓本を參考して、その變化と氣 多く翻刻に翻刻を重ねた拓本ばかりで如何程まで信用してよい 前田侯爵家の有に歸したものである。これ等は皆唐代の摹寫に 前者は秘府の尊職にかゝり後者は故岡田正之博士の舊職で今 か判 か こるものであるが、 りかねる。そこで王羲之の書を學 その他のものは

ない、 い、今ある蘭亭は皆唐時の書家が臨模した本を重刻に重刻を重ねたもので、 蘭亭によつて羲之を窺ふことは頗るむづ かしいこさである。 羲之の生采があらう筈が

その死に臨みこれを同葬するやうに遺言して遂に昭陵に埋められたさいふから、

眞跡の傳はる筈は

羲之の筆跡中尤も著名なものは蘭亭帖である、しかし蘭亭帖は後に唐の太宗の所有に歸して太宗は

張彥遠の法書要錄といふ本に唐の太宗が王羲之の書に心醉してその遺墾三千紙をあつめた、 これ等 はつ 定本と賀知章の臨本との二系がある後者南唐の頃澄清堂帖に刻入せられ、 め 石印に上され後叉日本人の手に歸して立派な玻璃版も出來てゐて可なり精巧なものであるが我國 れ等卷子のうち尤も有名なのが「十七帖」である。いはゆる十七帖はすべて二十一通の手紙を裝訂し たものでその卷頭に「十七日先書云々」さあるから名を得たものである。 遺墨は皆一丈二尺の長卷に仕立て紙の綴ぎ合せには「貞觀」の二字を二の印にしてこれを押し紫檀 に紫維標織 た喪亂帖等と比較すると矢張り神氣が足らぬ心地がする。 1-飜刻 せられたもので前者は清初姜西溟の家にあつた唐拓本が著名である。 の帶をつけて毎卷の初めにある二三字を取つてその卷子の題號としたといつてゐ 次いて叉宋の淳化閣 この卷の飜刻は褚遂良の校 唐拓本 は先年上 院帖や大 に傳

つて排斥しその後の鑑賞家もこれに雷同 さうしてこの碑は宋の頃まで除り尊重せられなかつたため拓本屋の手にいためられることも少なく一 々の文字に生氣がある。 מ, 石 i 刻 か られ たの 元朝の書家趙子昂はこの碑の文字の出所が明かでないから信用出來ないとい は永徽四年に褚遂良が書丹して長安の慈恩寺雁塔門に嵌 した人が多いが、それは未だ深く考へない ためであ め込ん だの が

之の筆跡中から拾ひあつめて碑に刻したもので、行草の體が巧に配合されて一種の趣きを出して居る

羲之の書として今一つ忘れてならないのは三藏聖教序である。これは唐僧懐仁が聖教序の文字を羲

歐陽詢、

薜少保と

最

初で、

その後十八年咸亨三年に懷仁の聖教序が建てられて居る。褚遂良は虞世南、

五四

遭つたのは當時高宗が先帝の後宮に仕へた武昭儀の才色に迷ふて皇后の廢立を行はうとして褚遂良、 ともに初唐の四傑と稱せられた書家で能書の故を以て太宗に拔擢せられ太宗の顧命をうけて高宗に事 へた人であるが、雁塔聖教の建てられた翌々年永徽六年には潭州に貶謫せられて居る。褚途良が貶謫に

を爭つたため、武后の怒りにふれて潭州に流されたのである。 于志寧等に相談があつたとき于志寧はたゞ默々として一言も發せなかつたが褚遂良は死を以てその非

さうして懐仁の聖教序は褚遂良貶謫の後十數年して建てられて居りその碑の末尾に于志寧等

溜色

をも奪ひ去らうと考へるに至つたであらう。さうして其目的を達するためには雁塔聖敎以上の名筆を る。恐らく褚遂良の直言を胸にもつた彼を潭州に貶謫しただけでは滿足が出來ず、彼の書に對する名聲 した般若心經が附刻されてゐる點なごを思ひ合すと、この碑の刻立された動機を忖度することが でき

出さなければならない○雁塔聖教以上の名筆を出すには王羲之をかりるより外に方法がない。乃て武后 教序の中に集められた王書は武后によつて供給せられたものである、太宗が輯めた王羲之の眞跡三千 は懷仁に命じて王書を集めてこの碑に上石せしめたのであらう。果してさうであつたとすればこの聖

て楷行の体に近い字は定武蘭亭に酷似したものが多い。これ等は恐らく蘭亭帖の唐搨本から拾ひあつ

ら拾ひ集めたものと想像せられその出所は頗る明瞭なものとなる。現に懐仁の聖教序中におい

紙中か

めたものであらう。 叉その中の行草に近い字はわが國に傳はつた喪亂帖や九月十七日帖と神氣の相通

福なことで、 が ずるところが く曖昧なものでない。さうしてそれが宋まで拓工の手にならされなかつたことは非常に幸 宋拓 ある。これ等の點から判斷すると懷仁の集めた王書は確乎たる根據のあるもので趙子昻 の聖敎序には眞跡を下る一二等の字がある。さうしてこの種宋拓本も今は精巧な玻

璃版によつて複製せられ何人も容易に手に入れることが可能る。

七帖等で間架を知ることがよいであらう。然しこれは素人の書論で勿論大家の前に言ふべきことでは 要するに昔から書といへば先づ第一に王羲之を數へるが、 その門徑は人々によつて見る所を異にするが先づ智永や喪亂帖等で筆意を學んで聖教序や十 王羲之を學ぶにはその門徑を得なけれ ば

一王書錄には更に詳細にその事情をのべて次の如くいつてゐる。 唐の太宗が王羲之に心折してその筆蹟をあつめたことは略上に述べた通りであるが、唐の張懐瑾の ない。

二千二百九十紙、 良と校書郎王知敬等とに勅して相ともに参校せしめ典儀王行真をして之を裝せしむ、 貞觀十三年勅して右軍書を購求 行書二百四十紙四帙四十卷、四尺を度となす、草書二千紙八帙八十卷、一丈二尺を以て度と 装して十三帙一百二十八卷となす。眞書五十紙一帙八卷、本の長短 せしめ並に貴價之に酬ふ、四方妙蹟畢く至らざるなし。 右軍の書 に隨つて度と 起居 郎 大凡

なす。

得る まつたことは疑はれない。 か 数字は實際参校の任に當つた褚遂良の は 問題であるが、 兎に角唐の太宗が非常な王羲之崇拜者で、 「晋右軍王羲之書目」と一致しないから、ごこまで信用し その結果朝廷には多くの眞跡が

集

草智 張耒の宛丘集に、 藁に太宗が古帝王龜鑑の語を眞書と草書でかいて二の屛風となして群臣に示したとい 太宗は單に王書をあつめただけでなく自分もこれを習つて立派な字がかけた人であつた。 カジ 傅 はつて居て、 太宗の書を評して、 その輕俊流便、 その筆精工法度粹美、 宛然として右軍(王羲之)永興(虞世南)の風度が これを二王帖中に雑ふ る も辯ずる能 あると賞 ふが、 弇州 今はた は 山人 叉 3

いる。 いて居るが、 舊唐書の東夷傳によると太宗は新維王の使者に對して御製の溫湯銘と晋詞碑と晋書とを贈つたとか いはゆる晋書は勅撰書で、 溫湯銘と晋詞碑とは太宗が自撰自書した自慢の書であつたと

と激賞したのを見てもその上手さが想像せられる。

太原府 でたことが 晋詞 か 碑 Ċ, は今も尚 西 あ 南約 3 北 __ Ш 邳 日行程で太原縣に到着する、 西太原縣に西晋詞の境内に立て居る。 から京漢線で石家莊までゆき石家莊 さうして縣の西方八支里に晋詞が 私はかつてこの碑を見んが から正大鐵 道 に乗り換て山 ある。 西太原 12 めに晋詞 顧炎武の金 府 Έ つく に詣

石文字記に

詞 は **縣甕山の麓にあり、** 晋水の發源する所、 後人此に辿を引き亭を結び橋をその上に架し、 林水翳 とな

におく を加 ひ歸 てゐ とい 又この碑 上年分に殘つた文字を熟視するこその形体風韵は羲之そのまゝで、 てたものであ 0 で から二十年の すの 然 るが、 궲 3 9 72 なが、 から たの 方の も辯ずるなしさいつたのも誠に理由のあることゝ感せざるを得ない。私はこの碑の拓本一枚購 か Ö) やうに感じた。なほこの碑の裏には當時太宗に隨從した唐初名臣の名が自署彫刻されて 兵を起すに 左 もとは風雨にさらされたものと見たて碑の下半分は剝蝕して一字を辨せない。 は簡単 勝となするに足る、 1 これを聖教序に比較するとその過半は聖教序と同じ形の字で聖教序を擴大して更に生氣 30 初 古くからこゝに唐叔を詞つたらしく北齊書に旣に晋詞の名が現は 宋の め 1 よつて碑の題額には「貞觀二十一年七月」と書ゝれてゐるこの碑は今碑亭で蔽 Ė 時重刻され か あたつてこの詞に祈願をこめたのであるから太宗は天下統一の後貞觀 その地勢で風致さを説きつくしてゐる。この地は周の初め唐叔虞の封 けて 山 西に た碑があつてその剝蝕の文字も補はれてゐるが その廟山を負うて東面するを晋水の神どなし南面するを唐叔 ゐた際この詞に詣でゝその成効を告げ翌二十一年 古人か太宗の書を評して二王帖中 その氣韵 n てゐる。 七月に は この ぜら 風 しかしその さう + 馬 九 Õ) 硇 n 神 も相 て唐 た地 は を建 の末

毎行四十四乃至五十字を收め

及ばぬ。

本碑の高さは一丈二尺二寸八分幅四尺九寸四分表面二十八行、

料を加へたものといひ得るであらう。 7 ゐる。この碑によつて太宗が如何に羲之をよく學んだかを證すると同時に羲之の書を髣髴する一資

まで明 以言原暑;易言考」といふが如き皆この拓本が温泉銘たることを示してゐる。さうしてその中に自稱 等それが溫泉銘であることは自ら推測せられるが、更にその序の部分に「遡|調風|以蕩」志、鑑||靈泉|而 根據はない、さうしてその銘文の中に「滔々靈水…蠲痾蕩瘵」といひ「偉哉靈穴、凝溫鏡徹」とい る。これを秀岳銘と呼んだのは銘の初めが でないが、その最後の十七行の銘の部分は絳州帖に刻入されて大宗の秀岳銘と呼ばれてゐるものであ 潮」心」といひ、又「炎景鑠時、長波不」足。「其熱「 霜風繋蔵、疊浪不」稍」「其寒、 不ヒ以」今古「變ー」質、 であらう。 温湯銘は趙 本は四十八行の剪裝本で毎行六七字から成つて居り初めの部分が破損してゐ 瞭でな 溫泉と溫湯とは同じ意味である。 しか かつたが、 明誠の金石錄卷四には「唐溫泉銘、太宗御製並行書」と記載されて居るものが 先年敦煌縣から發現した古鈔本中に偶然その拓本の一部分があらは 「巖々秀岳、横基渭濱」といふ句で起つてゐるからで深 しいはゆる温泉銘が如何なるものであつた て標題も筆者 即ちそれ も明 は最近 †z 不下 Š そ

る

朕」といつてゐるのはその作者の天子である證据で「世」の字「民」の字ともに欠筆して居らぬ

から他人がかけば世民の字は欠筆する筈である)これが太宗によつてかゝれた證据である。

「支那では天子の諱は遠慮して完全にかゝずに一畫を略しておくを禮とする、

世民は唐太宗の

一諱であ

のは

に存するが、 拓本は最初の部分がかけてゐて標題を失つてはゐるが、 かつて羅振玉氏によつて影印せられ後叉上海の文明書局から複印本が出てゐるから何人 **ぬ**。この本の原本は佛國の伯希和博士によつて佛國に持ち去られ今パリーの それは太宗自筆の温泉銘たることは分毫 國民圖

も容易に手に入れることが可能きる。

るとも劣ることなき力をもつた人だと思はれる。眞に彼は文武の能を兼ね備へた人で、文武皇帝と諡 で躬ら甲冑を衣て軍陣に出入した人であるが、その書においても不世出の天才で虞世南褚遂良にまさ 學んだことを首肯すると同時に又天性非常な腕を持つた人だと考へざるを得ない。彼は唐創 晋詞碑は に失は わ るが、 さて影印本の温泉銘を晋詞碑に對照すると晋詞碑は書体は整頓してゐるが轉折鋒穎がや れた骨力は温泉銘で補つて視るべきで、 これを温泉銘に對照することによつて朱竹坨の言が當つてゐることを覺える。 もと刻が淺くて字も細くあつたが後に庸工が字を俊へて深くした爲め骨力が して温泉銘は奔放を極めてゐて鋒頴猾新にして字は少し細く鋭い。 かく考へて太宗の書を見ると彼は王羲之の形貌をよく 朱竹坨のい 失せた کھ 從つて晋詞碑 · \ 鈍(所によると ح ارا 業の英主 っつて

日本の弘法大師や道風にもこの趣きが存するが太宗において特に顯著である。 乃で羲之を學ぶには太

ら王羲之の書を評して鳳翥鸞翔といふが

太宗の温泉銘は殊にこの

評に的中するやうに

思

は

れる

され

のも偶然でない。

一六〇

宗の書も参考する必要がある。

にしても古人の風韻を學んで暫らく現世を離脱するここができればこれもまた一つの樂みであらう。 し幼少の頃からペンや鉛筆を使び習された吾々は、到庭古人のやうに筆は使ひこなせぬ、よし及ばない 書は姓名を記すに足ると豪語した古人もあるが成らうことなら書はうまく書きたいものである。然

義 公 水 戶 光 圀 卿

江

崎

政

忠

格者 今日も猶且つ暇さへあれば、この著作に讀み耽つてをります。つく!~と思ひますに、我が皇室にお 此の明君を輔け、皇室の御爲め、我國のため、國民のため、盡瘁された――國家に功勢のあつた賢相 かせられては、 私は青年時代から史學に深い趣味を持ち、それに關する書籍や、人物の傳紀などを愛讀し、老年の 決して少なくはありませんが、しかし我國三千年の歷史を通じて、古今に優越したる一大人 いづれの點から見ても、少しも缺點を見出だせない大人格者は誰であるかと問はれましたら、 御歴代いづれも叡明にわたらせられたこさは、申す迄もございませんが、その間また